

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	中尾 友彰
主な担当科目	アートマネジメント概論①,アートマネジメント概論②,インターンシップ①,コンサート・オペレーション研究,音楽活動研究①,音楽活動研究③,音楽芸術運営特別演習②,音楽芸術環境研究Ⅰ,企画制作演習Ⅰ,企画制作演習Ⅱ,芸術運営ゼミ①(大学研究生),芸術運営ゼミ②(大学研究生),芸術運営演習,芸術運営実習,卒業研究
2025年の教育目標・授業に臨む姿勢	実務家教員として、20年以上にわたる劇場職員としての経験と専門的知見を基盤に、理論と実践を往還する授業運営を目指す。「アートマネジメント概論」では、芸術文化を支える法制度の背景や役割を実務事例と結び付けて解説し、現場で活用できる理解の定着を図る。さらに新科目「ミュージック・コーディネート演習」では、アウトリーチ・プログラムを実践的に構築できる人材の育成を目的に、企画立案から実施・検証までを見据えた指導を行い、学生の主体的な学びを促進する。
2025年の教育に関する自己評価	アウトリーチ研究者としての専門性を活かし、教育内容の質的向上に取り組んだ。特に、学生がアウトリーチ・プログラムを実際に実演し、それに対して教員が直接フィードバックを行う授業手法を「ミュージック・コーディネート演習」で新たに導入したことで、企画意図と実践との接続を深める学修環境を整えることができた。また、最新のアートマネジメントおよびマーケティングの知見を授業に反映し、学生の主体性と理解度の向上につなげた点は、今年度の教育成果である。
2025年のFD活動に関する自己評価	本年度は、学内で実施されたすべてのFD研修に参加し、教育改善および大学運営に関する理解を深めた。特に、学長・理事長・副理事長による講話を通じて、本学の中長期的な教育方針や組織運営の方向性を再確認するとともに、ハラスメントや研究倫理に関する研修を通じて、教育現場における教員の責務を改めて認識した。また、セメスター制度導入やカリキュラム改訂に関するFDでは、教育内容との接続を意識し、今後の授業運営に活かす視点を得ることができた。
授業改善のために取り入れた研修内容	FD研修会で扱われたセメスター制度導入やカリキュラム改訂に関する内容を踏まえ、授業構成や課題設定を見直し、学修の到達目標が学生にとってより明確になるよう工夫した。また、学生・教員間の連絡やコミュニケーションに関する研修、ハラスメント・研究倫理に関する講話を受け、多様な学生が安心して学べ、意見表明できる授業環境づくりを意識した運営を行った。これらの学びを、日常の授業進行やフィードバック方法の改善に反映している。

2025 年度(春学期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:3567 教員名:中尾 友彰

【アートマネジメント概論①】

教員名:中尾 友彰、高野修平、星野 友子、高橋 陽子

1)アンケート結果に対する所見

「アートマネジメント概論①」の総合満足度は「そう思う」86.5%、「少し思う」13.5%であり、否定的回答はなく、全体として高い評価を得ている。自由記述からは、実践的体験やアートマネジメントにおける様々な職種や領域の話が理解を深めたとの声が多く、導入科目として一定の成果が確認できる。一方で、教育到達目標の達成度や授業時間外学修時間には改善の余地があり、パワーポイントのさらなる改良等、学修の質の向上が今後の課題である。

2)要望への対応・改善方策

教育到達目標の達成度向上に向け、各回の学修目標をより明確に提示し、授業のまとめにおいて到達度を振り返る時間を設ける。また、授業時間外学修を促進するため、事前課題や簡易レポート等を通じて継続的な学修機会を設計する。実践的要素の充実は維持しつつ、体験と理論を結びつける整理の時間を意識的に確保する。

3)今後の課題

概論科目として学生の関心を喚起する役割は果たしているが、興味を一過性のものにせず、体系的理解へと接続する工夫を引き続き行いたい。多様な履修者がいる中で、専門志向の学生と演奏専攻の学生双方にとって意義ある学修内容をどう構成するかも課題である。双方向性を高め、主体的学修を促す授業設計をさらに検討していきたい。

以 上

2025 年度(春学期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:3567 教員名:中尾 友彰

【ミュージック・コーディネート演習①】

教員名:渡辺 章、仁科 岡彦、池田 雅明、服部 孝也、浦 丈彦、尾崎 有飛、中村 佳子、
彦坂 眞一郎、二俣 泉、藤田 真頼、中尾 友彰

1)アンケート結果に対する所見

「ミュージック・コーディネート演習①」の総合満足度は「そう思う」78.6%、「少し思う」14.3%であり、概ね高い評価を得ている。一方で「あまり思わない」も 7.1%おり、改善が必要である。また自由記述からは、アウトリーチや多様な視点に触れられたこと、挑戦する姿勢が育まれたことへの肯定的意見が多く、実践的演習として一定の成果が確認できる。一方で、教育到達目標の達成度や学修時間にはばらつきが見られ、理解の定着をより確実にする工夫が課題である。

2)要望への対応・改善方策

教育到達目標の達成度を高めるため、各回の目的と評価基準をより明確に提示し、演習後の振り返りを体系化する。また、授業時間外学修を促すため、数回のレポート課題の導入も検討し、学びを言語化する機会をさらに設ける。学内外による講師の多様な視点という強みは維持しつつ、内容の整理と接続を意識した授業構成へ改善する。

3)今後の課題

実践的演習として高い評価を得ている一方で、体験を単なる経験に終わらせず、理論的理解へと結び付ける仕組みづくりが今後の課題である。また、履修者の意欲や経験値に差がある中で、全員が主体的に挑戦できる環境をどのように設計するかも検討が必要である。

以 上

2025 年度(秋学期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:3567 教員名:中尾 友彰

1)アンケート結果に対する所見

授業アンケートでは、担当科目全体を通じて概ね良好な評価を得ることができた。講義科目では、アートマネジメントや音楽活動を取り巻く社会的背景について、知識の修得にとどまらず現場の事例や実践と結び付けて学ぶ機会を提供したことが、学生の関心や学修意欲につながったものと考えられる。自由記述においても、講義と実践の配分や、学外講師・現場との接点について肯定的な意見が見られた。

また、演習・実習科目では、公演の企画制作、アウトリーチ、レセプション業務等を通して、教室内の学びを実際の現場や社会との関わりの中で捉え直す機会となった。特に、親子向けコンサート「音楽の贈り物」や小学生向けアウトリーチ・プログラムの開発、公演現場での実習等は、学生が音楽を届けることの意義や、他者と協働することの重要性を体験的に理解する機会になったと考える。

一方で、企画制作型の授業では、学生の主体的な関与の度合いや役割遂行の状況によって、達成感や学修成果に差が生じる傾向も見られた。今後は、学生の経験や関心の違いを踏まえながら、より効果的な学修支援を行っていきたい。

2)要望への対応・改善方策

自由記述欄では、多くの科目において授業内容や実践的な学びに対する肯定的な意見が寄せられ、具体的な改善要望は多くなかった。一方で「音楽活動研究」においては、親子向けコンサートのような実践の機会を複数回実施してほしいという意見も見られた。学生にとって、他コースの学生と協働しながら演奏会やアウトリーチをつくる経験は貴重であり、地域と大学をつなぐ機会としても意義が大きい。ただし、実施回数を増やすためには、授業時間、準備期間、会場、出演者、運営体制等の調整が必要であるため、今後の検討課題としたい。

今後も、講義・演習・実習のいずれにおいても、授業の目的や到達目標を学生により明確に示し、学びの流れを理解しやすくする工夫を続けていきたい。特に複数教員で担当する科目については、各教員の専門性を活かしつつ、授業全体として一貫した学びとなるよう、担当教員間の情報共有や授業内容の接続をさらに意識する。また、演習・実習系科目では、学生ごとの役割分担や進捗状況を丁寧に確認し、実践後の振り返りや意見交換を通して、経験を学修成果として定着させるよう努めたい。

3)今後の課題

今後の課題は、学生の満足度だけでなく授業を通じて得た学修成果をどのように把握し、次の学びにつなげていくかである。アートマネジメントにとって重要な企画制作、公演運営、アウトリーチ等に関する学びは、知識の理解だけで完結するものではなく、学生自身が考え、他者と協働し、社会の中で音楽や舞台芸術をどのように届けるかを実践的に考えることが重要である。

そのため、今後はレポート、発表、振り返り、ディスカッション等をより効果的に活用し、学生が自分の学びを言語化する機会を充実させたい。特に実践型の授業では、単なる作業分担や本番参加にとどまらず、各自が自らの役割と責任を理解し、経験を将来の活動やキャリアに結び付けられるよう指導していく必要がある。学生一人ひとりの関心や進路を踏まえながら、実践力、思考力、発信力の向上につながる授業運営を今後も継続していきたい。

以 上